



1986-6
No. 213

【表紙】

森の輪 II

(国立西洋美術館蔵)

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

特集：文化財の保存整備と活用

歴史の道の整備と活用	上原 茂	4
風土記の丘	文化財保護部記念物課	6
映像と民俗文化	姫田 忠義	8

エッセイ

タイムトンネル下関	星野哲郎	10
—新人として—	池波正太郎	11
▶名勝紹介シリーズ◎◀		
枯山水	—龍安寺方丈庭園—	12

書の手が書に生きる	小松 茂美	14
文化庁創設の頃	小川 修三	16
	内山 正	17

報 告	・第二国立劇場(仮称)の設計競技について	18
	・昭和60年度日本語教育実態調査報告について	20

・第1回“国民文化祭”今秋開催!	22
・著作権法一部改正法、プログラム登録法成立!	23
・本の紹介「国民文化の創造」	23

文化庁ニュース

・昭和60年度民間芸術等振興費補助金の 交付状況について	24
・昭和61年度こども芸術劇場公演について	26
・昭和61年度青少年芸術劇場公演について	27
・昭和61年度中学校芸術鑑賞教室について	29

・文化庁行事報告及び予定	30
・国立劇場ニュース	31

特集 映像と民俗文化



姫田忠義

●文化財の保存整備と活用

人はそのひとりひとりのからだのなかに
すこいほどのものを秘めている。……その
ものに触れ、啓示される、それが私の支え
であった。

一九七六年(昭和五十一年)、私たちは一本の
記録映画を自主製作した。「奥会津の木地師」
一六ミリ・カラー・五十六分である。

福島県南部の山地帯で、昭和初期まで移動
性の生活をしながら木地桶をつくっていた木
地師の技術を、その体験者たちによって再現
記録したもので、幸い文部省特選の評価をも
得たものだが、その最初の上映会とき、少
なくとも私にとっては忘れることのできない
ひとつの出来事があった。

フィルムの上映が終り、会場が明るくなっ
たので、私は一人の人を舞台に招じた。映画
に登場していた木地師さんの一人、星平四郎
さん(七〇歳)である。

途端に、客席から一斉に「ほおーッ」とい
う嘆声があがり、満場がどよめいた。

平四郎さんは、昔流に言えば五尺そこそこ
の小柄な人である。その小柄さは、遠い客席

の人からでもわかる。しかも平四郎さんは、
生まれてはじめての晴れがましい場にとまど
い、身を縮めるようにして舞台にあらわれ、
立ちつくした。その姿は、どう見ても善良で
非力な一人の老人としか見えない。が、映画
では、二かかえも三かかえもあるブナの巨木
をヨキ一丁で、四十五分で伐り倒し、寸分違
わないヨキサバきで、その巨木から次々に椀
の荒型を切り出し、観るものを感嘆せしめた
人である。「これがあの木地師さんか!」この
小さな体のどこに、あのすさまじいエネルギー
と技術がかくされているのか!。満場のど
よめきは、そういう観客たちの驚きと感動の
あらわれたものであった。

人は、からだのなかに、その外見からは容
易にうかがい知ることのできないエネルギー
や技術、あるいは知恵を秘めている。そして
その内なるものの表現として、さまざまな生
活行為があり、またそれと分かちがたいもの
として多彩な生活文化がある。

一九六一年(昭和三十六年)以降私は、ごく
少数の仲間とともに、主として私自身がそこ
に属している日本人の生活行為、生活文化を、

化して以来二十五年、いまはこうはつきりと
言いきることができた。

「私が志しているのは、伝統的な民俗行事や
祭りのかたちの記録ではない。それを伝えて
いる人間の記録だ。」

「かたちは変化する。が、それを伝えつつい
まに生きている人間の内部には、一朝一夕に
は変ることのない深く根強いものが秘められ
ている。ひよっとしたらそれは、この日本列
島に人が住みはじめて以来のもの、あるいは
それ以前から伝えられているものかもしれな
い。その深く根強いものを私は探っているの
だ。」

「何のために。」

「明日のために。私たちが明日に向かって生
きて行くために、その深く根強いものを学び、
承けつづることが必要なのだ。いや、必要不



奥三面の山人

要という次元の問題ではない。脈々たる生命
の流れのなかで、私たちがどう生きて行くか
の問題なのだ。私のやっている映像的手段に
よる記録作業は、そういう私なりの生きざま
の証しでもある。」

人は大自然のなかで、脈々たる生命の流
れの中で「生かされ、生きていく」……。

一九八〇年(昭和五十五年)以降、私たちは
新潟県北部の山村、朝日村奥三面の生活と生
活文化の記録作業をつづけて来た。その三年
目の冬、一人の村人が私に言った。

「おれたちは、山に生かされて生きて来た。
幾多の思慮、心の支え……、おれには山しか
山がいいとしか言えねえなあ。」

「山に生かされて生きて来た」この言葉は、
私にとっては非常な啓示であった。そこには、
ややもすれば今日の私たちが忘れがちな深い
伝統的な日本人の精神文化がある、と私は思
った。そして同時に、これこそ明日に向かっ
て生きる私たちにとって最も大事な精神文化
であり、ふだん私なども言い言いつている人
間の基層文化だと思った。

人は大自然のなかで、脈々たる生命の流れ
のなかで「生かされて生きていく」、これはひ
と日本人のみでなく、広く人類共通の生命
観、自然観の表出である。地球上の、殊に古
い歴史をもつ民族に共通のものであり、宗教
哲学、科学などあらゆる人類文化の源も、実
はこの観念に発しているとは私は思うのだが、

映像的手段(主に映画)で記録する作業をつ
づけて来た。

ときあたかも経済高度成長期にあり、日本
人の生活と生活文化の激変期であった。殊に
いわゆる伝統的なものの破壊、消滅、変容の
激しきは、すさまじいばかりであった。その
すさまじさに呆然たらざるを得ないこともし
ばしばであった。が、その私を今日まで踏ん
ばらせてくれた唯一のものがあつた。それは
人である。そこに人がいる、ということであ
る。

人は、そのひとりひとりのからだのなかに、
すこいほどのものを秘めている。奥会津の木
地師はそのいい例だが、もちろん列举できる
のはそれだけではない。アイヌの人たち、周
防猿まわしの人たちをはじめ、日本各地の農
山漁村の人たちなど乏しい私の体験からして
も枚挙にいとまがない。そしてその人たちに
出会い、その人たちの秘めているものに触れ
啓示される、それが私の支えであった。

私が志しているものは、伝統的な民俗行
事や祭りのかたちの記録ではない。それを
伝えていく人間の記録だ……。

「伝統的な民俗行事だ、祭りだと、君は古い
ものばかり追いかけている。消え行くものば
かり追いかけている。どうして新しいものや
今日のものをやらないのか。」

しばしば私はそう問われて来た。
返答に窮したこともある。が、活動を本格

それがこの一人の日本の山人のさりげない言
葉のなかにあらわれたのである。

この山村は、一九六九年(昭和四十四年)以
降、新しいダム建設による全村水没の問題を
背負われ、苦しみつづけて来たところであ
る。私たちは、この一軒の家を借り、畑も
借り、自炊しながら記録作業をつづけて来た。
個々の民俗行事や祭りなどの記録のためでは
ない。この村の人たちの生活と生活文化、そ
して何よりもこの村の人たちの生きざまを丸
ごと感じとり、記録する。それが私たちの志
すものであった。記録してはしなくも、先の人
の言葉を聞くことができたのである。

もしも私たちが、片々たる行事や祭りの記
録をこととしていたら、あるいはこの言葉は
あらわれなかったかもしれない。ダム問題に
触れられることを極度に嫌う村人たちのなか
で、しばしば居たたまれないものを感じなが
らへたりこんでいたからこそ与えられた啓示
であった、と私は思っている。

映像手段は、読んで字のごとくものごとの
すがた(像)をうつす(映す)手段にすぎな
い。と同時に、過去を映すことはできず、「いま」
を映すことしかできない。そういう有限
な手段を駆使しながら、目には見えない壮大
な生命の流れを、せめてその一端でも表出し
たい、そう私は願いつづけている。

姫田忠義(ひめだ ただし)

記録映画作家、映像人類学、民俗文化映像
研究所長

編集後記

○今月号では、「文化財の保存整備と活用」をテーマとして、歴史の道と風土記の丘をご紹介しました。ともに歴史的遺産を周囲の環境と一体的に保存活用しようとするものです。

○文化財を単に保存するだけではなく、私たちの生活の中に生かし、いかに活用を図っていくかが大切な課題といえるでしょう。上原氏の玉稿には、まさに「文化財の保存整備と活用」の実践例が息づいています。

○今月は、姫田、星野、池波、小松各先生にご寄稿いただきましたが、第一線で活躍する方の信念、生きざまが描かれており、改めて我が身を振り返らせられました。

○六月は文化庁創設の月です。先人のご苦労は小川、内山両先生の随想からしのべますが、私たちが初心にかえって文化行政にたずさわってまいるところです。

(S)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)2681-2411(代表)

「文化庁月報」六月号

昭和61年6月25日印刷・発行
(通巻第123号)
編集 文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい
本社 半田東京都中央区豊洲7丁目4番12号
営業所 千代田区新富区西五軒町52番地
電話(03)2681-2411(代表)
振替口座 東京 91161番
印刷所 (株)行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)
年間購読料 二一六〇円(送料共)